

平成28年度みんぱく若手研究者奨励セミナー発表要旨
民族誌映画における現実はどうのように作られるのか
村津蘭

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

本発表では自身が撮影、編集を実施した映像作品「ヴォドゥンの季節」の抜粋版（約20分）を上映した後、口頭発表で作品のポストプロダクション過程を分析することにより、フッターを民族誌映画にするという行為について考察する。

上映する映像は、ベナン共和国中南部ティオ区において今年1月から3月の農閑期に約2ヶ月にわたり実施されたヴォドゥン祭礼を追ったものである。ヴォドゥンは多様な性格を持つ神格の総称であり、この祭礼では瘡瘡や雷、蛇の神格などが霊媒師に憑依し、踊る。映像は祭礼だけでなく、霊媒師の日常生活や、この期間に実施された大統領選挙のキャンペーン活動と霊媒師の関わりについても焦点をあてている。

記録された映像素材を編集作業を通して「映画」にしていくという行為は、ジョン＝マーシャルなど人類学者が映写機器をフィールドで用い始めた時代からされていた。近年においては、被写体が人間でなく、カメラを人間が操作しないという方法で撮影された「リヴァイアサン」が民族誌映画として提示されるなど、人類学的な映画はその領域と方法を刷新し続けている。しかし、例えば衛星が送り続ける気象映像が映画でないのと同様、人類学者が記憶のために記録しただけのフッターも、「民族誌映画」とはなり得ない。それでは何によって「民族誌映画」は成立するのだろうか。村尾（2015）は映像作品を仕上げしていく作業を「現実からもうひとつの新たな現実を築いていく」（p.37）ことであるという。民族誌映画とは、映像が一定の時間の中で組み合わせられることによって、「現実」性を獲得したものなのかもしれない。しかし、ただ映像断片を組み合わせるだけでは獲得しそうでない「現実」は具体的にはどのようなものによって作られているのだろうか。

この問いに答えることの難しさは、その「現実」がまさに映像によって立ち上がっている限り、言葉で代替できるものではない点である。そのため映画のリアリティといった表現は定義が曖昧なまま流通してきたといえる。そこで本発表においては、フッターから民族誌映画を作ろうとする過程で何を行ったか、或いは議論されたかを検討することにより、民族誌映画の作り手、或いはそれを志すものにとって、民族誌映像が「現実」を獲得するために何が必要であると考えられているかを見る。ポストプロダクション工程において行った映像素材の取捨選択、鑑賞会を開いて他の作り手から受けた指摘をフィールドワーク的に分析することによって、「民族誌映画」を成立させる映像によって立ち上がる「現実」について考察したい。

【参考文献】

村尾静二（2015）「2 学術映像の制作に向けて 文化科学・自然科学における映像制作の基本問題」分藤大翼・川瀬慈・村尾静二編「フィールド映像術」古今書院 p.37